

恍惚の人

——映画文学人生論

原作：有吉佐和子 (1972年)
監督：豊田四郎 (1973年)
出演：立花茂造 森繁久弥
茂造の妻 小野松江
立花信利 田村高廣
立花昭子 高峰秀子

脚本：松山善三
撮影：岡崎宏三
音楽：佐藤勝
京子 乙羽信子
門谷のお婆ちゃん 浦辺糸子

おれもいつか、おやじみたいにボケるのかな

豊田四郎監督の映画『恍惚の人』で、ボケ老人役の森繁久弥の顔をみて、案外若いなと思った。メーカーキャップで八十四歳の老人らしく見せかけているが、この映画を撮影時の森繁久弥は六十歳。俳優の実年齢でいえば。若年性アルツハイマー病ではないか。老年性アルツハイマー病と認められるのは六十五歳になってからだ。

映画の封切からすでに四十年。森繁久弥だけでなく、「おれもいつか。おやじみたいにボケるかな」と言っている息子役の田村高廣も、ボケ老人の世話を引受けさせられる主婦役の高峰秀子も鬼籍に入ってしまった。そして、当時は青二才だった私が今や恍惚の人になりかけている。

月日の経つのは早いものだ。有吉佐和子の原作には「昭和八十年には六十歳以上の人口が三千万人を超え、日本は超老人国になる運命をもっているという」とある。昭和八十年といえ、平成十七年（二〇〇五年）で、すでに七年前に通過してしまっただけだ。

その運命を有吉佐和子は四十年前に予言し、超老人国のさまざまな問題を指摘している。ボケ老人の食事、排泄、入浴などの世話を誰がどのようにするのか、徘徊など異常行動に誰がどう対処するか、老人クラブや老人ホームでの老いるの恋愛やトラブルをどう解決するかなど。



恍惚の人 —— 映画文学人生論

当時の平均寿命は男性が六十九歳、女性は七十四歳だったという。現在は男性七十九歳、女性八十五歳——男女とも僅か四十年で約十年も寿命が伸びている。ということは、その間に老人人口が激増して、問題が深刻化していることを意味する。

他人事ではない。今や私も渦中にいる。今回、映画を観て、原作を再読し、ボケ老人の行動を自分のこととして考えた。老耄の極に達すると、自分の排泄物を食べたり、体になすりつけたり、丸めたり、投げたり、壁に塗りたいくったりする。いわゆる人格の欠損という現象だ。ああはなりたくないと思うが、なってしまうかもしれない。

人格の欠損や人格崩壊を防ぐためにはどうすればよいだろうか。「趣味は持つべきですつてよ。それに、絶えず頭も躰も刺激を与えないと呆けるんだって、みんな言うわね」と高峰秀子は言う。

なるほど、すると、文学や映画にもボケ防止、人格崩壊の抑止力効果があるかもしれない。しかし、高名な文学者にもボケ老人の例はいくらでもころがっているから、あてにはならない。

しかし、『恍惚の人』は社会に大きな影響を与えた文学の一例である。介護保険制度の実施促進に貢献したとも言われている。ほんの気休めかもしれないが、藁をもつかむ気持をこめて、文学の効用を信じることにしよう。

恍惚の人の駆けゆく年の暮